

# 中国の文字改革前史

伊 井 健 一 郎

## I. 漢字の変化発展

今日、漢字は我々の日常生活において、切っても切れない存在となっている。それは「少なくとも紀元前千五百年よりも早く」<sup>1)</sup>中国大陸で、中国語を表わすために生まれた文字だ、と記されている。漢字は、原則として、一字で一語を表わす文字（表語文字）であり、字数はきわめて多く50,000字前後もある。それは日本、朝鮮、安南（ベトナム）などに広まり、今では中国、日本および韓国<sup>2)</sup>、シンガポールにその使用は限られている。

日本では、漢字から音節（モーラ）文字の片仮名、平仮名が作られた。また畑、峠、働く、辻などの和製漢字（国字）も作られた。読みには、原則として音（中国語の音に由来）と訓（その字の意味にあてた日本語）がある。

本稿は、まず漢字の進化、発展にふれて、次に、旧中国における漢字改革の動きを概観する。そのなかで、1949年以降の文字改革の動向を展望しようとするものである。

### 1. 文字の発展

最近「漢字は五、六千年の歴史をもっている」<sup>3)</sup>と語られる。大汶口文化には、5,000余年前に若干の地区で通用したすこぶる進んだ文字が発見されてい

---

注1)『日本国語大辞典』第5巻、小学館、1973年。

2)『文化誌世界の国・朝鮮、モンゴル』、講談社、1975年152ページ。朴政権になってハングル専用政策が徹底され、看板や教科書、公文書から漢字が消え、すべてハングルに統一された。……もともと新聞だけは、いまま漢字とハングルが併用されている。

3) 唐蘭「文字学規劃初步設想」、《中国語文》、1978年第2期。

る。また郭沫若 (Guō Mòruò) は、「半坡遺跡の年代は、いまから六千年ぐら  
い前であり」、「これも漢字の発展史である」<sup>4)</sup>と述べている。このように数千  
年の長い生命力をもつ文字が、果して地球上に他に存在したであろうか。こ  
の地上で最も早く生まれ、最も長く生存し、発展した歴史をたどっている文  
字の一つ——それが漢字にほかならない。

一般的に表現すれば、漢字は甲骨文字から現在まで、すでに3,000余年の歴  
史をもち、社会の発展につれてたえず新陳代謝をしてきたといえる。どの歴  
史的発展の時期にも、必ず多くの新しい文字が生まれ、また多くの無用の古  
字が淘汰されたであろう。

文字は、元来不変のものではなく、文字の発展にはそれ自身の客観法則が  
ある。内外の文字発展の歴史が証明しているが、どの種類の文字であれ、総  
じて言えば「象形文字から次第に表意、表音文字へ向かって発展するこのよ  
うな過程」<sup>5)</sup>を経ている。ラテン字母は、一種の表音字母であるが、その歴史的  
発展からみると、どの字母も最初は、ある種の実物の図形を代表していた。  
つまり“象形”だった。曲りくねった発展過程を経て、最後に純粹に音を表わ  
す字母になったのであり、同時に字母の形体も簡略化された。

漢字の発展も同様の、似たような過程を経てきている。上述のとおり、数  
千年来の中国社会の発展と筆記用具の変化、発展につれて、漢字は形体上多  
くの進化をみせており、甲骨文より金文、大篆、小篆、隸書そして楷書まで、  
字形的にしだいに簡略化された。その上に表音の要素が逐次増えて、形声字が  
ますます多くなってきた。

報道によると、900年前に中国北部で使われていたがその後絶滅した契丹文  
字の研究で、近年大きな進展がみられている<sup>6)</sup>。とりわけ、20世紀後半の50  
年～70年代、多くの民衆が新たな簡略字を創造しているが、これも漢字発展  
の趨勢を反映したものにほかならない。

4) 陳煒湛「漢字の起源」,《人民中国》,1978年2月。

5) 文華「文字必須改革」,《人民日報》,1973.7.6。

6) 《北京周報》,1978.9.5 (No. 35)。中国社会科学院民族研究所と内蒙古大学の研究  
グループは、378字のうち130以上の発音を確定し、400以上の語彙の意味を解説した。



清代張玉書 (Zhāng Yùshū), 陳廷敬 (Chén Tíngjìng) らの《康熙字典》は47,035字を収めている。上に引用した字書に収められている字数からみると、最も多いもので4~5万字, 少ないので, 1万字前後である。』<sup>8)</sup>だが, この10,000から4~50,000字の中でも, 多くは重文 (異体文字) であり, また相当多くの字は, 今日すでに使われないものである。

それ故に, 現代通用している漢字は一体いくらか, と問われると, ただ上記の字書に収められた字数からは, 簡単に答えることができない。

これまでに出版された比較的大きな字典からみると, 漢字は「おおよそ5万字」<sup>9)</sup>あるが, 不用の古字を除くと, 約10,000字が通用している。そのうち「常用字は5千字」<sup>10)</sup>であり, 非常用字が5,000字である。5,000の非常用字の中には, 異体字, 人名・地名専用字, 科学技術専用字, 文語用字などが含まれる。

《新華字典》は, 異体字も含めて, 8,500字前後を収めており, 現代通用漢字の全貌を比較的良好に反映している。この字典をもとに「初歩的統計をとってみると, 異体字と繁体字を除いて, 合計7,650字が通用漢字となる。」<sup>11)</sup>しかし他方では, 常用字はおおよそ4,500字ともいわれ, 小学校の段階で, 3,500字ぐらいが学ばれている。その数のなんと多いことか。漢字をへらす作業は, 今後まだまだ続けられるであろう。

### 3. 「聖人」造字説

4~50,000にもおおよぼ漢字, その字は一体誰が作ったのか? これには長い間, 異なる回答が出されてきた。歴代の支配階級とりわけ儒教学派は, 「蒼頡 (Cāng Jié) 造字」を説いた。戦国時代には, 「蒼頡作書」の記載がある。漢代になると, 「蒼頡造字」説はいつそう流行した。許慎の《説文解字》には; “黄

8) 王克仲, 管燮初, 麦梅翹「通用漢字的数量能否簡縮一半?」, 《漢字的整理和簡化》, 文字改革出版社, 1974年。

9) トカ「漢字精簡大有可為」, 同上書。

10) 丁川「漢字字数必須進一步精簡」, 同上書。

11) 王克仲等, 前掲論文。

帝之史倉頡，見鳥獸蹄迹之跡，知分理之可相別異也，初造書契。”<sup>12)</sup>とある。「文字創造の功勞をすべて蒼頡一人に帰しており、これは一種の“聖人”造字説である。」<sup>13)</sup>

彼には目が4つあったともいうし、また彼が文字を作ったとき空から米が降ってきたとか、幽霊が夜泣きしたとかいった怪談がある。後に、ある人は蒼頡を奇怪な人物に描き、彼が「生まれてすぐ字が書けた」（生而知書写倣鳥跡以造文章）ので、文字の創造は、神のさずけものだ、と言った。それは劉安 (Liú Ān) の《淮南子》、《春秋演孔図》などに登場する。これは「一種の“神授”説であり、文字は聖人を通じて神が造らせたものだ」<sup>14)</sup>ということである。

これに対して、魯迅 (Lǔ Xùn) は、史的唯物論の観点を運用して、「蒼頡造字」の神聖説を暴露し、それに反駁した。彼は言う；文字は、全く蒼頡が造ったものではなく、ある「後世の聖人」が造ったものでもなく、さらに後の「文字を売りものにする」「いわゆる文学者」の発明したのでもない。……それは、広範な勤勞人民である。“文字は人民大衆の間に芽生えていた”！彼は「生而知之」、「上智下愚」の唯心史観を批判し、転倒された幾千年の文字起源史を再度くつがえした。

およそ紀元前16世紀～前11世紀に建てられた商朝は、中国で文字記載のある最も早い奴隸制国家である。殷商甲骨文の中にすでに“国”の字があるが、これは“国”の最も早期の書き方であり、武力で人口（住民）を護るという意味である<sup>15)</sup>。……文字の発明によって、人類は文字で記載された歴史に入った。奴隸制時代に、エジプトの象形文字、バビロニアの楔形文字、中国の甲骨文字などは、どれもかなり高い水準まで発展して、それは原始社会の図画文字とは大いに異なっている。「こうした文字は、奴隸たちが長期の生産闘争

---

12) 段玉裁注《説文解字注》，上海古籍出版社，1981年753ページ。

13) 夏峙冰「学習魯迅，改革漢字」，《人民日報》，1974. 11. 4。

14) 同上論文。

15) 上海師範大学政教系編写組《社会発展史》，1974年77ページ。

と階級闘争の中で、次第に創造してそして進化発展してきたものである<sup>16)</sup>。」

魯迅は、大量の材料を用いて、文字起源の歴史を科学的に考察している。彼は明確に指摘しているが、原始人は生産労働の過程で、一頭の牛を描いた。「野牛について、野牛を奪い取るためにかあるいは野牛を忌みきらい、まじない事のためにか。」後になって人々は、「野牛というやつは、元来線で別の平面上に移すことができる（可以用線條移在別的平面上）ことを知り、同時にどうにか一つの“牛”の字を知った」、これが文字の由来である。社会には、蒼頡一人にとどまらず、ある者は刀の柄に一点の図を刻むだろうし、ある人は門のとびらにいくらかの絵をかくだろうし、以心伝心、口から口に伝わって、文字は多くなった。史官がそれを集めて、広く伝えて書きとめた。「中国文字の由来は、恐らくこの例をのがれることはできないであろう。」<sup>17)</sup>

魯迅は、文字が人民大衆の社会的労働生活の中で、集団の知恵を通じて、しだいに創造されていったものであり、神が某「聖人」などを通じて造ったものではないことを説明している。およそ「聖人」を装って、「無理やりに新蒼頡になり」文字を造った人は、いずれも失敗した。

有史以来の長い年月において、文字を創造し、文字を改革する民衆の権利は、労働と社会的闘争の実践の中で獲得されてきた。文字以前の「結繩」<sup>18)</sup>は、勤労人民が社会の実践の中で行った一種の創造だった。大衆が文字の創造者であり、また文字を発展させる偉大な原動力である。民間に現われる「俗字」とは、本来は誤字である。それをやみくもに正字として認めることは、いささか不見識<sup>19)</sup>だとの見解を述べる識者もいるが、その実「俗字」は、民衆の言語生活をタイミングよく反映しており、文字発展の方向を代表している。かつて支配階級の言った「正字」は、文字をますます生きた言語から遠ざけ、文字の生命を窒息させるものだった。「正字と俗字の闘い」が文字の発展をお

16) 同上書89ページ。

17) 魯迅《門外文談》，人民出版社，1974年12ページ。

18) 程祥徽「将文字交給大衆」，《光明日報》1973.10.10。

19) 山田勝美「漢字入門」，《言語》，大修館，1977.7。

し進めた一因でもあり、大衆の「俗字、俗体」<sup>20)</sup>は、たえずその主導権をとってきた。

数千年の歴史を経てきた漢字は、今日また新たな歴史的飛躍を期待されている。10億の中国の民衆は、新しく創造する文字とそこへたどりつくまでの段取りについて、真剣に対処していくと思う。

## II. 漢字改革運動の沿革

文字は、一般的に形意制度 (picto-ideograph) から意音<sup>21)</sup>制度 (ideo-phonograph) に発展し、そして再び拼音 (pinyin) 制度に発展するという法則を示している。拼音制度 (音標) は、また音節字母から音素 (音位) 字母に、単に輔音 (子音) を表わすことから元音 (母音) を表わすものに発展する。音素字母の音標文字は、人類の偉大な発明であり、最も少ない符号で複雑な言語を描き出す。「表意から表音に変わることは一つの飛躍であり、大きな発展である。」<sup>22)</sup>形意制度から意音制度への発展が第1次飛躍といえ、意音制度から拼音制度への発展は第2次飛躍だといえる。

漢字が生まれてからこのかた、字を知らないがゆえに、何程多くの民がそれによって災難をもたらされたことか、そしてどのくらいの印刷工、植字工などが苦しみをなめさせられてきたか。多くの先人たちは、“平民教育”のため、“救国”のため、そして“新中国のため”に、文字改革のために、生命をもかけてきた。

### 活字の穴蔵で——郭沫若 (1923) <sup>23)</sup>

---

20) 『中国語』、大修館、1978、1 (No. 216) 4 ページ。《漢字正字小字彙 (初稿)》(文字改革出版社、1966年)の前書き：「大衆の間で通用している通俗的な字の書き方を俗体として収録した」、73年第2次印刷では、「大衆の中に流行している新簡化字を収録した」となった。「新簡化字」として公認されたわけである。

21) 裘錫圭「漢字的性質」、《中国語文》1985年第1期。周有光 (1957) による表意と表音の2種の表現方法を総合的に運用した“意音文字”の主張。

22) 《光明日報》、1974. 10. 25。

23) 須田禎一訳『郭沫若詩集』、未来社、1972年。

まっ黒々な活字の穴蔵で、  
一群の蒼白い影がうごめいている、  
みんな十三、四歳の少年たちで、  
その顔色は鉛で汚れた白紙みたいだ。

### 1. 時期区分

解放前1世紀にわたる中国の歴史は、帝国主義による侵略とそれに対する人民大衆の絶え間ない闘争のおりなす歴史である。侵略が強まるほど、闘争は激化した。漢字改革の運動は、文化面における闘争意識の一つの現われでもあり、文化革命のカギとなる環でもあった。闘争の高まりにつれ、運動は起伏をくりかえしながら前進した。

西洋人が中国へ渡り、漢字を学ぶ必要性を感じたのは、主として17世紀初頭(明末)、ジェスイット教宣教師が布教するためであった。その領袖ともいべきマテオ・リッチが《程氏墨苑》<sup>24)</sup>という本に、ペン書きにしたローマ字と漢字とを対照させた文章をのせている。西暦1605年のことだった。また中国へ渡ったニコラス・トリゴーは《西儒耳目資》<sup>25)</sup>を著わし、極めて精密な操作のもとに、中国語または漢字をローマ字と対照研究しており、それは1626年に刊行された。

教会ローマ字は、後に漢字改革運動にいや応なしに一定の影響を与えることになる。だがそれは中国人による文化革命とはならず、あくまでも列強による文化侵略の一手段にすぎなかった。そしてラテン字母の中国語音訳は、運動発生以前の前奏曲をかなでたにすぎなかった。

さて、ここで周有光(Zhōu Yǒuguāng)<sup>26)</sup>による時期区分と幾人かの先達によるそれを紹介する。

前 史：西洋人の漢語音訳と教会ローマ字

---

24) 倉石武二郎『漢字の運命』, 岩波書店, 1952年35ページ。

25) 同上書37ページ。

26) 周有光《漢字改革概論》, 澳門爾雅社, 1978年18ページ。

第1期：切音字運動（“中国切音新字”から注音字母まで）

第2期：広義のラテン化運動（国語ローマ字，ラテン化新文字から漢語拼音方案まで）

第3期：漢語拼音教育の普及と漢語拼音文字の成長時期（1958年以後）

ここでの問題は，第2期における漢語拼音方案までを周氏が一つの時期にした点である。1949年の新中国成立は，たとえ運動が解放区などで引継がれて連繫をもっていたとしても，明白にそれ以前とは，時期を画すべき性質をもつ。第2は，“漢語拼音文字”を第3期で提起しているが，それはあくまで漢語拼音方案（・は筆者）である。拼音字母にすぎないものを「文字の成長時期」だというのは，不適切であろう。

A. 羅常培 (Luó Chángpéi) 《国音字母演進史》(1934)

1. 漢語拼音字母の発端（西洋人のローマ字つづり）
2. 国語ローマ字の進展
3. 注音字母の進展

B. 黎錦熙 (Lí Jīnxi) 《国語運動史綱》(1934)

1. 切音運動時期
2. 簡字運動時期（王照，勞乃宣）
3. 注音字母と新文字連合運動時期
4. 国語ローマ字と注音符号推進運動時期

C. 陳望道 (Chén Wàngdào) 《中国拼音文字的演進》(1939)

1. 西洋人自身の漢字学習の時期
2. 到る所で音標文字を綴る，教会伝道専用の時期
3. 教育普及の道具としての時期

D. 倪海曙 (Ní Hǎishǔ) 《清末漢語拼音運動編年史》(1959)

1. 反切と改良反切
2. 外国字母を漢字に注音
3. 教会ローマ字
4. 近代の民族漢語表音運動 切音字運動，注音字母運動，国語ローマ字運動，

## ラテン化新文字運動

これら5人のほか、倉石氏は『漢字の運命』の中で、音標文字の創作、国語運動30年、ラテン化新文字と筆を進められ、新中国の初期の動向をも述べておられる。

本稿は、今の時点で、この運動全体を全面的に検討しようとするものではない。これらの時期区分を参考にしながら、動向を概観し、きわだった人物を幾人かとりだして、その歴史の一端を追ってみるものである。

## 2. 音標文字

アヘン戦争以後、列強はますます多くの商人、宣教師を中国に送った。彼らは、中国語の学習と宗教伝道の必要上から、多くのさまざまな「漢語拼音方案」を作った。その中でも最も影響が大きかったのは、郵政式<sup>27)</sup>と威妥瑪式(T. F. Wade)である。彼らはラテン字母を使って、中国各地の方言の拼音案を作った。そのうち閩南(Mín nán)の白話字(すなわちアモイ語のラテン字母表音案)は影響が最大で、多くの書籍が出版された。今に到るも「アモイ一帯では、多くの人がこの案を知っており、多くの華僑がこのラテン字母を使って海外の親戚と手紙のやりとりをしている」<sup>28)</sup>とのことである。

こうした環境のもとで、中国人は漢字に疑念をもち、その改革を企てた。1892年、福建の盧懋章(Lú Zhuàngzhāng)は、十数年の苦勞のすえ、55の記号をローマ字式字母として、中国第一快切音新字を作った。そしてその字母で書いた読本《一目了然初階》を作った。人々は、初期の漢字改革運動を“切音字運動”<sup>29)</sup>と呼んでいる。のちに、彼はまた中国切音字母をまとめた。

そのあと間もなく、福建で力捷三(Lì Jiésān)、上海で沈学(Shěn Xué)、香港で王炳耀(Wáng Bǐngyào)などが同様の企てを発表し、蔡錫勇(Cài Xīyǒng)

27) 同上書175～176ページ。《光明日報》(78.10.25)例：北京、天津をウェード式は Peching, Tienchin とつづるが、英文で流行している書き方は、Peking (旧伝統)、Tientsin (郵電式)である。

28) 周恩来《当前文字改革的任務》，人民出版社，1977年14ページ。

29) 周有光，前掲書26ページ。

は伝音快字<sup>30)</sup>と称して速記文字を作った。

1906年、盧の中国切音字母に対して、訳学館教授の音韻学者(汪榮宝 Wāng Róngbǎo と推定される)は、長文の審査書を書いた：盧氏の著述は子音、声調、書き方に問題があり、全国通用の標準音標にすることはできない。漢字は中国国粹の源泉で、一切の文物の根本だから廃止はできない。むしろ漢字のほかに音標文字を作り漢字と並行すべきである<sup>31)</sup>。

盧はこの仕事に、30年の歳月を費した。その成果は不遇の中に葬られたが、当時の多くの愛国的な人々をよびさまし、それ以降積極的に文字改革が提唱されていった。《一目了然初階》が出版されてから辛亥革命までの20年間に、28種の切音字方案が提起された。それは字母形式のちがいにより3種類に分けられ、漢字筆画式、速記符号式、ラテン式字母などであった。

——切音字運動の主流——

八ヶ国連合軍の北京入城の年1900年、王照 (Wáng Zhào) は官話合声字母<sup>32)</sup>を創作した。清末に、各種の漢字筆画式字母のうち、これが最も早く提起され、最も広く伝わって、切音字運動の主流となった。王照は、日本亡命中に、教育普及の工具(手段)として仮名の働きを認めたにちがいない。彼は、政府が下層の教育に注意し、言文一致をはかるような文字を作るよう要望していた。

彼は北京に官話字母義塾を設立、門人の王璞 (Wáng Pú) に教授させた。王照の字母は、いわば反切を改良して、子音、母音を示すために一定の記号を作ったものである。二綴りからなり、子音の字母が50、母音が12だった。当時、官話字母の読物は、“字母書”と称された。王照の《出字母書の緣故》にはこう書かれている<sup>33)</sup>：この字母書はなぜ出されたのか？すべて字を知らな

---

30) 倉石、前掲書42ページ。兼子次生「中国の速記」、『アジア経済旬報』、中国研究所、1984年10月下旬号。

31) 倉石、前掲書45ページ。

32) 倉石、前掲書47ページ。周有光、前掲書、30ページ。1895年の豆芽字母も漢字筆画式だが、公開されなかった。

33) 周有光、前掲書31ページ。

い人のためにおこされたのだ。以前字母のなかった時は、読書がむつかしかった。……字母が出てからは、大いにやさしくなった。賢い者なら4、5日で、少しにぶい者でも10日間で学びとれる。……漢字のそばに字母をふり、字母を借りて漢字を知る。日がたつにつれて、……字母のない本でも読めるようになる。

これは今世紀初頭、注音による文盲一掃を宣伝した白話文である。王照は、このように官話字母を積極的に提唱したが、漢字の廃止は主張しなかった。「拼音文字を“俗語”とし、漢字と俗語の併用、相互補助<sup>34)</sup>」となえた。日本の仮名と大差のない地位を与えよう、というのが彼の要求だった。

音韻学者勞乃宣(Láo Nǎi xuān)は、終始王照の字母を鼓吹した。官話字母の基礎の上に、方言字母を補充し、“合声簡字”と称した。子音に6、母音に3、四声に入声を加え、増訂合声簡字譜<sup>35)</sup>として、南京付近と安徽一帯に通用させた。1905年、彼は総督に建議して、南京に簡字半日学堂を設けた。そして5年後、彼は北京で簡字研究会を設立した。当時の資政院は、官話の簡字普及などの請願をうけて、音標文字を定めること、などを決議している。

ところで、中国の漢字簡略化の運動は、清朝末期に陸費逵(Lù Fèikuí)が1909年《教育雑誌》創刊号に「普通教育に俗字を採用せよ」という論文を発表したのがその始まりであった<sup>36)</sup>、と言われている。

### 3. 国語運動

清朝の転覆直前まで論じられた切音字運動、表音字母の問題は、そのまま民国政府に継承された。1912年7月、北京の教育部で臨時教育会議が開かれ、注音字母(すなわち漢字の音を示すための字母)採用の案が採択された。そして12月には、読音統一会の規則が制定され、その翌年に会が正式に開か

34) 許宝華, 顔逸明「堅持文字改革的正確方向」, 《語文學習》1978年第3期28ページ。

35) 倉石, 前掲書58ページ。

36) 『中国文化叢書1言語』, 大修館, 1967年403ページ。

れ、議長に呉敬恒 (Wú Jìng Héng)<sup>37)</sup>、副議長に王照が選ばれた。時の教育総長は、蔡元培 (Cài Yuán péi) であった。

この会議の任務は、国音を定め、音素を査定し、字母を裁定することだった。漢字の読音を決めるために、暫定的に決めた記音字母を改めて、正式の字母にする段取りになって、議論が百出した。意見は主として、偏旁派 (王照、汪榮宝)、符号派 (盧憲章、呉敬恒) およびローマ字派 (呉敬恒、劉繼善 Liú Jì shàn) と分類されるが、西洋の字母あり、漢字の偏旁あり、縮写もあれば図画もありで、ありとあらゆるものがそろって、しかもそれぞれ趣向をこらしていた。古典によるもの、音韻学によるもの、国際音標によるもの、科学を楯にとるものなどで、皆が蒼頡となり佺盧 (Qū Lú)<sup>38)</sup>となるつもりであった。それらはみな、表音字母を目標とするだけであった。

馬裕藻 (Mǎ Yù zǎo)、朱希祖 (Zhū Xī zǔ)、許寿裳 (Xǔ Shòu shāng)、錢稻孫 (Qián Dào sūn)、周樹人 (Zhōu Shù rén 魯迅) などの提議で、最初の記音字母をそのまま昇格して、正式の字母にすることが承認された。それはいわば、漢字の極めて簡単な形をそのままとって字母にしたもので、普通の諧書の形に直しているから角ばっていた。この方法を最初に考えたのが章炳麟 (Zhāng Bǐng lín) だった。会議は、この注音字母<sup>39)</sup>を命名し、6,500の漢字に対する注音の仕事が終了した。字母は合計39だった。また会議では、次のことが決められた：字母の講習所を設ける。国文科を国語科に改めるかまたは増設する。小学校の教科書には、全部漢字の横にルビをふること。一切の公文書や布告は、みなルビつきで出すことなど。

志ある人たちは、文字の問題に注意し、競って新聞・雑誌に意見を發表した。特に言文一致と国語統一が主な論点であった。1917年、アメリカにいた

---

37) 倉石、前掲書64ページ。呉は漢字を廃止し音標文字を用いよ、と以前から主張している。『世界の名著④、孫文、毛沢東』、中央公論社、1969年203ページ。1865～1953年、字が稚暉、孫文死後は、国民党右派に属し、反共主義者として終わった。

38) 倉石、前掲書72ページ。これも「漢字創作者」の一人という。

39) 同上書74ページ。

胡適 (Hú Shì) は、北京大学の《新青年》に「文学改良芻議」<sup>40)</sup>という論文を載せ、国語研究会に口語でハガキを寄せた。同研究会は、16年に組織されたが、17年の大会で蔡元培と張一麟 (Zhāng Yīlín) を正副会長に選んだ。そして18年11月、5年間放任されていた注音字母は、教育部によって正式に公布された。

1919年教育部は、“注音字母音類次序”を公布し、字母の順序を新しく配列し直した。字母を増やしたり、書法体系を公布したりして、注音字母は20年より小学語文教育の第1のカギとなった。それは中国初の法定の漢語拼音字母<sup>41)</sup>だった。その主な特長は、次のとおりである：字母は古漢字より選んだ、音節拼写法は三綴り制をとった、用途は漢字の読音表注である。こうして前後40年間程、注音字母は、漢字の読音統一、国語の推行、拼音知識の普及などで、文字を覚えやすくする道具として、大衆の間に基礎を築いていった。

18年12月には、国語統一籌備会 (準備会) の規定が公布され、19年4月正式に成立し、会長に張一麟、副会長に袁希涛 (Yuán Xītáo)、呉敬恒が選ばれた。第一回大会で、小学読本の改編が決議され、20年訓令となった。会の仕事としては、注音字母の整理と京国問題すなわち標準語を北京音にとるか、人為的な国音にとるかという問題だった。23年の準備会第5回大会で、京音調で完全に北京語を標準とすることに決定した。26年には、錢玄同 (Qián Xuántóng)、黎錦熙、趙元任 (Zhào Yuánrèn) など (数人会メンバー) が国語ローマ字<sup>42)</sup>拼音法式 (つづりかた) を制定し、準備会に出した。それは28年、当時南京にあった大学院によって正式に布告され、国音字母の第二式と決められた。

昨84年5月、台湾は国語ローマ字を修正し、“国語注音符号第二式”の試用

40) 市古宙三『中国の近代』、河出書房新社、1974年242ページ。それは俗語、俗字の使用を避けないなどの8点を強調し、「古文を用いず、白話すなわち口語文を用いよ」というものだった。

41) 周有光、前掲書34ページ。

42) 倉石、前掲書98ページ。なお28年の正式公布も、当時の大学院長蔡元培1人の地位で、むりしてかちとったものである。

を公表した<sup>43)</sup>。これは「国語文教学をおし広める必要にマッチするため」ということだが、国際的環境を考えると、その意義は小さくない。一方国音字母の第一式は、注音字母だが、それも30年4月、注音符号と改称された。(国民党政府下で、“字母”の名称は保てなかったのである。)

清末の切音字運動家は、漢字をなくすことは主張しなかったが、学びやすく、使いやすい漢語拼音文字の必要性を主張していた。それは漢字と併用することであり、漢字のため注音工具(道具)を定めるという要求などではさらさらなかった。しかし注音字母が生まれると、白話のつづりは、読音の表注まで後退した。注音字母の職務は、“漢字につかえる、漢字によりそう”ものになった。

注音字母は、文字以外の音標符号にすぎない。それは実際上は、終始“注音”の範囲をこえ難いが、そのカギは主に技術上の欠点にあるのではなく、それは応用する人たちが用途を制限していることにある。用途において、注音字母は、切音字運動家たちの最低要求を発揮したにすぎない。

国語ローマ字運動の提唱者銭玄同は、1918年、何よりも「一挙に漢字を廃しなければならない、その代りに拼音文字にするのだ」<sup>44)</sup>、漢字は「孔門の学説と道教のこたばを記載した記号」だと非難し、儒学を廃し道教を滅ぼすのが唯一の方法だといひ……人為エスペラントにまさるものはない、と述べた。23年《国語月刊》の「漢字改革」号では、拼音に改めることは絶対に可能なことだといひ、拼音文字が漢字より一歩進んだ文字であることを肯定している。そして拼音字母は、世界の字母——ローマ字式の字母を採用すべきだ、と国際音標の使用を主張した。しかし後日、彼はやはり漢字を用い、字数を制限し、漢字のそばに注音字母をふることに主張をかえた。

呉敬恒は、20年、注音字母などというものは、読音統一を助ける方法であり、また文字を覚えやすくする道具たるにすぎない、と述べた。そして27年「草鞋と皮鞋」を書いた。初等教育の普及こそ、救国の根本策だ。だから応

43) 《文字改革》, 1984年第5期(147号)。

44) 《語文學習》, 1978年第3期, 28ページ。

急手段としてみれば、注音字母は教育普及のこの上ない利器である（第三の草鞋式研究）。あまりまずいものでは困るので、今の注音字母で改良していく（第二の草鞋式研究）というのであった。また注音字母の効用として、漢字の読みをつける、読音を統一する、文字に代用する（最も浅く、狭い用途に限られる）などをあげている。人間の猿智恵で作った文字などが、そのままの形で、未来永劫まで続くものではないことを見通していた。

中国は、遠い先には、音標文字になるであろうが、今のところは漢字に対して注音符のルビを用いて間に合わせる。……やや高級むきとして国語ローマ字を作った<sup>45)</sup>というのが錢玄同の意見である。

一面では、漢字をうち倒してローマ字に切りかえたい、100年かかって1,000年かかってかまわぬとの念願は、陰に相当わだかまっており、これがやがてラテン化新文字という新しい方向に結集したのである。歴史全体からみると、注音字母の誕生は、数千年にわたる文字史のなかの一変化の始まりであった。

#### 4. ラテン化新文字

注音字母とともに国語ローマ字が確定したのは、1928年のことだが、いわゆるラテン化新文字もその頃には、すでに胎動していた。いやむしろ最初のラテン化の試みは、漢字筆画式字母の主流下にあつて、切音字運動期の一支流にすぎない部分もあった。

盧の《一目了然初階》(1892)には、ラテン字母の対音（音を合わせる）がつけられていた。王炳耀、蔡錫勇にも同様の対音があつた。しかし意識してラテン字母を漢語拼音の字母に採用したのは、1906年朱文熊(Zhū Wén xióng)の《江蘇新字母》<sup>46)</sup>であつた。

彼はこう述べている：世界にいまだかつてない新字を造るよりは、世界で

45) 倉石、前掲書100ページ。その「技術上の特長」、「拼調規則の要点」などは、周有光、前掲書42ページ参照。

46) 周有光、前掲書38ページ。

通用している字母を採用する方がよいと考える。欧文（ラテン字母）をとって……新字母とする、我国通俗の文字として使い、まずは江蘇にて試験してみると。これは明らかに、ラテン字母の採用を主張した最も早いものであり、中国人が自覚的に定めたラテン字母式方案の最初のものであった。ラテン字母は、音素字母であり、声韻（子音と母音）符号ではないから、音節つづり方も自然と反切法の束縛からはなれ、音素制となっている。

そして2年後、劉孟揚 (Liú Mèngyáng) は、《中国音標字書》を出版し、双字母を用いず完全にラテン字母を採用している。その翌年、黄虚白 (Huáng Xūbái) は漢字筆画式方案《漢字音和簡易識字法》を書き、《拉丁文臆解》の中ではラテン字母式方案を提起し、双字母を補充手段として使っている。蔡元培は、漢字改革について“一は完全に革新的な、ラテン字母を用いるもの、一は古音に近づけるために、形声字上声の偏旁（つまり声母を用いる）を完全に用いて、一切の合体字に代える”<sup>47)</sup>と意見を述べている。

国語ローマ字に続いてラテン化新文字がやってきたが、それは日本や西欧の影響ではなく、ソビエトの影響であった。それは社会主義十月革命の産物であり、最初在ソ華僑の間で行われ、間もなく中国国内に伝わり、大衆的なラテン化運動を形成した。

瞿秋白 (Qū Qiūbái) は、ソ連で呉玉章 (Wú Yùzhāng) と志を合わせ、新文字問題を研究した。そして29年、《中国ラテン化字母》と題する小冊子を作った。30年、呉玉章は《ラテン化中国字初学教本》を書き、林伯渠 (Lín Bóqú)、蕭三 (Xiāosān) らと10万の中国人労働者のために、ロシアの言語学者ドラゴノフの協力のもと、ラテン化中国字を正式に制定した。“ラテン化新文字”の制定は1931年だった。

31年9月、中国新文字第1回代表大会がウラジオストックで開かれ、華僑代表と労働者が約2,000余名参加した。大会は、「中国漢字ラテン化の原則と規則」を採択し、「中国新文字方案」を制定し、華僑主として労働者の中での

---

47) 《蔡元培選集》，中華書局，1959年。高平叔編《蔡元培教育文選》，人民教育出版社，1980年169ページ。

だちにおし広めるべく決議した。

呉玉章は、林伯渠らとラテン化中国字委員会を組織し<sup>48)</sup>、「中国文字的流源及其改革的方案」、「中国新文字的新文法」などの文章を書いた。32年に第2回大会が開かれ、新文字の出版と教学の問題が討議された。識字班や伝習所があまねく設けられ、ソビエト国家出版部の援助で、50余種、10万部の印刷物が出版された。34年にはハバロフスクで《擁護新文字十日報》が創刊された。

ラテン化新文字は、最初は対象がソ連在住の華僑だけだったが、方案創作の時から、呉玉章らは漢字を根本的に改革する目的を抱いていた。「中国漢字ラテン化の原則と規則」は次のように説明している<sup>49)</sup>：象形文字（漢字）を根本的に廃棄して、純粹の音標文字にかえなければならない。……真に通俗化した、勤労大衆の文字を作り、現代科学技術の要求にマッチする文字を採用し、国際化の意義を重んじなければならない。以上の目的を達するには、ラテン字母を採用して漢字のラテン化をするほかに道はない。だが新文字の実行とは、ただちに漢字を廃棄することではなくて、新文字を次第に大衆の生活の中におし進めていくことであり、適当な時期になったら漢字をなくすことができる、と述べている。

今日、中国の「社会主義革命と社会主義建設事業にとって、漢字はますます適応性を欠くようになった」ために「漢字改革の必要性が増大している」が<sup>50)</sup>、「表音文字の方向」が「中国の漢字改革がたどるべき」道筋として、半世紀前つとに提起されていたことを、我々は先人の発言から読みとることができる。

1933年頃、上海の言語関係者は、ラテン化新文字を国内に紹介し、熱烈な歓迎をうけた。33年8月、焦風（JiāoFēng）は《国際毎日文選》に「中国語書法のラテン化」（エスペラント語）を転訳した文章を載せ、続いて上海エスペラント協会の《言語科学》にも「中国語書法ラテン化方案」の紹介をのせた。

48) 王宗柏「呉玉章同志对中国文字改革的貢獻」，《光明日報》1978. 5. 19.

49) 周有光，前掲書45ページ。

50) 《人民中国》，1977年増刊号。

当時、国内の進歩的作家たちは、“文語体復興運動”に対して、白話擁護の立場から“大衆が話せて、聞いてわかり、はっきり読めて、順調に書ける”大衆運動を提起していた。34年6月、《中華日報》に「大衆語の記録問題」（張庚 Zhāng Gēng）が掲載され、一般大衆に最も力強くラテン化新文字の存在を知らせた。7月には葉籟士（Yè Lāishì）が「大衆語，土語，ラテン語」を書き、方言区毎のラテン化実施により文盲を消滅すべきことを唱えた。このようにして大衆語運動とラテン化運動は、自然と合流していった。

(A) 文字をすべての人に！

1934年8月、魯迅は、人の質問に答えて、《社会日報》に初めて大衆語について語り、大衆語文をひろめるには、ローマ字音標を用いるほかにない、と述べた。8月16日「門外文談」<sup>51)</sup>を書きあげ、これを《申報》に発表し、ラテン化は誰でも読み書きができ、しかも早く書けることをその特徴として指摘した。

彼は「漢字とラテン化」の中で、皮肉な言葉を放っている<sup>52)</sup>：漢字は古くから伝えられた宝物だ、しかしわれわれの先祖は漢字よりもっと古い、してみればわれわれはもっと古くから伝えられた宝物だ。漢字のためにわれわれを犠牲にする位なら、われわれのために漢字を犠牲にするだけだ。こんなことはまだ精神病にかかっていない人ならすぐ答えられるほど分りきった問題だ、と。

それまで30年、注音字母や国語ローマ字を推進し、国語運動に相当な貢献をした黎錦熙さえ、まだこの頃はラテン化に反対し、ラテン化が国語統一を破壊するとか唱えていた<sup>53)</sup>。こうしたとき、魯迅は同年10月、「中国語文の新生」を著し、12月にはハバロフスクの《擁護新文字六日報》（以前の十日報）に、「新文字について」の文章を発表した。漢字は、愚民政策の有力な道具である、だからそれを除かぬ限りは、ただ死あるのみ。ラテン化こそ勤労大衆

51) 《門外文談》，人民出版社，1974年。

52) 魯迅《門外文談》38ページ。

53) 倉石，前掲書113ページ。

自身のものであり、唯一の活路だ、と述べている。

彼は「中国の文化が向上するには、大衆語、大衆文を提唱しなければならず、その上書法はなおさらラテン化でなければならない」<sup>54)</sup>と述べ、漢字の難解さが大多数の苦しんでいる大衆と前進すべき文化とをかけ離していると考えた。彼はまた病床に《救亡情報》の記者を招き、「漢字が減びなければ中国は必ず滅びる」とまで断言した<sup>55)</sup>という。それはつまり新しいラテン化法の研究による漢字改革の主張だった。彼は鮮明なプロレタリア階級の立場に立って、大衆語とラテン化を提唱した。

「彼の漢字改革の理論は、中国の文字改革理論の中で、重要な構成部分となっている。」<sup>56)</sup>36年10月、文豪魯迅が逝去したとき、全国民の哀悼は想像を絶した。その葬儀のとき、郭沫若は聯（対になっている文句の書）を送り、「阿Q正伝」にも比べて、彼のラテン化に尽した貢献を次のように推奨している。そして聯には、ラテン化新文字で書かれたものも少なくなかったという。

曠世名著推阿Q

畢生傑作尤拉化<sup>57)</sup>

(B) 全国的なひろがり

ラテン化新文字は、理論から実践へと発展し、34年8月上海で、中文ラテン化研究会が結成された。北平、天津、太原、長沙、蘇州、無錫、広東などにも研究会や促進会が成立し、37年7月までに、その数は70以上に達した。35年12月、蔡元培、魯迅、郭沫若<sup>58)</sup>など文化界688人は、「われわれの新文字推進に対する意見書」に署名し、ラテン化新文字を熱烈に擁護した。これには毛主席の賛成と積極的な提唱<sup>59)</sup>がなされた。35年冬には、延安だけで100の農民

54) 周溶泉、徐應佩「読魯迅關於文字改革的雜文」、《光明日報》1973. 11. 10。

55) 倉石、前掲書115ページ。

56) 陳鶴琴「宣傳党的方針、加快文字改革步伐」、《光明日報》、1978. 7. 30。

57) 倉石、前掲書117ページ。

58) 鄭林曦 (Zhèng Línxī)「郭老熱心文字改革的二三事」、《光明日報》、1978. 7. 15 郭沫若は1935年日本滞在中、「留東新聞」で「皆さん新文字を学んで下さい」という文章を書き、ラテン化新文字に賛成し、それを宣伝した。

59) 《光明日報》、1978. 5. 19。

新文字夜学校が設立された。

新文字の統一した全国的組織は、陶行知 (Táo Xíngzhī)<sup>60)</sup>の発起により、35年12月中国新文字研究会として発足した。出版物も61種にのぼり、定期刊行物は36種に達し、その他40余種の印刷物がラテン化を提唱し、60余種が新文字の標題を用いた。日本帝国主義による大規模な中国侵略が拡大しつつあったとき、中国におけるラテン化新文字の伝播は、民族解放の運動と結合して、前代未曾有の大衆的な文化革命の運動を形成した。教育部でもラテン化幹部訓練班を設けて、教師を農村や工場に派遣した。延長県の魯迅師範などでは、一切の課程を新文字で教えるほどであった。

なかでも上海事変による難民収容所に対する教育活動は、めざましいものがあった。数ヵ月を経ずして、30～40ヵ所に新文字班ができていった。国際救済会の難民教育組主任だった陳鶴琴 (Chén Hàoqín)<sup>61)</sup>によると、当時新文字を学ぶ難民児童は約20,000、新聞売りの児童は1,000余、難民成人は2,000余人だった。彼らは、ラテン化新文字、漢字および注音字母の教学実験を行った。そのうち漢字班が最も成績がよくなかった。難民収容所では、ラテン化新文字によって、文盲一掃の教育を進めたのであった。

抗日戦争の時期に、新文字運動は、砲火で打ちのめされるのではなく、その中で一步一步発展していった。それは農村、工場、軍隊そして難民の中へ入っていった。大都市からかなり小さな都市、偏僻な地方へ、そして南洋の華僑の中へも伝わっていった。上海における48の難民収容所では、100回余りの難民新文字班が行われた。陳望道、周建人 (Zhōu Jiàn rén) など多数がこの運動に参加し、展覧会、講演会、教師の検定や養成、そして字母案の改正など

---

60) 斎藤秋男、新島淳良『中国現代教育史』、国土社、1962年163～165ページ。35年12月、上海の知識人、民族資本家は、上海文化界救国会大会を開き、救国運動宣言を発表した。陶は36年初め、国難教育社を結成、「国難教育方案」を出した。5月に全国各界救国会連合が成立した。

陶行知著、斎藤訳『民族解放の教育』、明治図書出版、1961年83ページ。陶は「音標新文字は、大衆の文字である」と述べる。

61) 《光明日報》1978. 7. 30。

を行った。

広州文化界救亡協会は、新文字救亡学校を設立し、香港新文字学会（39年成立）<sup>62)</sup>は、放送を通じ中国の新文字運動の意義を国外に紹介し、新四軍には新文字研究会が設立された。38年3月、新文字は、初めて「純學術の立場から研究……社会運動における一種の工具」として、正式に解禁されたのだが、国民党の「異党活動制限措置法」（1939）の規定は、大きな重圧となっていた。運動の中心は、漢口、広州から香港、重慶に、そして延安へと移っていった。39年、教育部は重慶で、全国教育会議を開き、40年3月の会議では、5年間に文盲を一掃するという計画だけは立てていた。

### (C) 識字運動へ転換する延安

1938年1月、辺区新文字促進会は、冬季学校で講習に努めた。40年1月、文化界救亡協会代表大会は、ラテン化の意義を強調し、呉玉章が《中国文化》で、「文学革命と文字革命」を発表した。そこでは漢字をすぐ捨てるのではなく、新文字を普及してゆけば、自然と漢字を使う人がなくなるわけで、……漢字の改革には反対しない、と述べられている。毛澤東 (Máo Zédōng) は40年1月、「新民主主義論」でこう述べた<sup>63)</sup>：「文字は一定の条件のもとで改革しなければならず、ことばは民衆に近づけなければならず、民衆こそ革命文化のかぎりなくゆたかな源であることを知らなければならない」。40年11月、延安に陝甘寧辺区新文字協会が結成された。林伯渠、呉玉章、董必武 (Dǒng Bìwǔ)、徐特立 (Xú Tèlì)<sup>64)</sup>、謝覺哉 (Xiè Juézhāi) の“五老”はじめ、艾思奇 (Ài Sīqí)、周揚 (Zhōu Yáng) など99人が連署し、賛助人として毛澤東以下55人が署名して、11月7日に、成立大会を開いた。毎年この日を中国文字革命

62) 同上紙, 1978. 7. 15. 41年重慶頼家橋で、郭は文化工作委員会主任だった。国民党の圧制下、39年夏、張一麟らが香港で新文字運動を展開、《香港新文字学会会報》を出版した。41年の会報に、郭老人は文字音標化運動の話を書いた。

63) 《毛澤東選集》第2巻、外文出版社、1968年525ページ。1964年、66年版668ページ。

64) 周世釗《我們的師表》、北京出版社、1961年63ページ。徐老人は、紅軍が江西ソビエト区に入った時、教育部長をつとめ、地方識字班、訓練班を創設した。40年、延安では困難な条件下で、自然科学研究院の院長を務めた。

節<sup>65)</sup>と名づけることも決められた。

当時は、文盲が人口の80%以上を占めていた。延安における協会の成立大会は、毛澤東を主席団名誉主席に、林老人、呉老人などを主席団メンバーに推挙した。呉玉章は、新文字訓練班の経験を総括し、18歳の農村婦人が1ヵ月の学習で本を読み、手紙を書けるようになった例をだし、新文字が学びやすく、応用しやすいことを説明した。そして“今年新文字で冬学を開き文盲をなくそう”という毛澤東の指示にしたがって、次のように協会の任務<sup>66)</sup>を提起した。

1. 政府が新文字で冬学運動と国民教育、社会教育を展開するのを援助する。
2. 新文字報と各種の新文字のテキスト、字典と読物を出版する。
3. 新文字訓練班を開き、幹部を養成する。
4. 中国語文の研究を強化する、まず辺区の方言、土語を。
5. 辺区の蒙古族、回族と団結、連繫し、蒙古族、回族の民族語のラテン化方案を研究、制定する。
6. 全国各地の新文字団体、進歩的言語学者と密接に連繫をとり、全国語文改革運動をおし進める。

また当時辺区政府の主席であった林伯渠は、あいさつのあと、政府を代表して、新文字の合法的地位を告げた<sup>67)</sup>。すなわち“新文字を用いて報告を書き、公文書、記帳、領収証の発行、通信……一切の用途に通用し、法的に漢字と同等の効力を有する旨規定する”のだった。成立大会は、最後に毛澤東、朱徳 (Zhū Dé) など5人を名誉理事に、45人を理事に選出した。

毛澤東は、40年次のとおり指示した：今年は必ず新文字で冬学を試験的に開き、文盲をなくさなくてはならない、と。そして41年1月、延安市、延安市新文字冬学成績展覧会が開催された。41年5月15日、毛澤東は特に《新文字報》に題辞を書いた：適切におし広めよ、広範になればなるほどよい。

---

65) 倉石、前掲書121ページ。

66) 《光明日報》1978. 5. 19。

67) 同上紙。

## “切実推廣，愈廣愈好”

朱徳総司令も“大衆適用的新文字努力推行到全国去”（みんなに適用される新文字を全国におし広めるよう努力しよう。）と題辞を書いた。

レーニンはかつて「ラテン化は、東方の偉大な革命だ」と述べたが、辺区新文字協会の成立と新文字の推進は、確かに“機関車”とし、模範としての役割を果たした。敵後方の各抗日根拠地と八路軍、新四軍の多くの単位で、新文字団体が成立した。延安を中心としてくり広げられた全国的な新文字運動は、解放後、全面的な文字改革の活動を行うために、貴重な経験を提供してくれたといえる。

ところでラテン化新文字は、声調を表示せず、方言をつづることなどを技術的特徴とする。少数特定の書き方を除いて、異調同音語は、書写形式において、区別をつけないのである。新文字運動は、初め“国語運動の統一”に反対し、“地方の発音”をつづるよう主張した。“ソ連極東の中国人労働者は大多数が北方人だったから、まず北方の発音を標準として教本を編さんした”，これが最も広く伝わった北方語ラテン化新文字（北拉）だった。1934—37年に定められた方言ラテン化方案は、13種あり<sup>68)</sup>、一方言区には往々にして幾種かの小方言文字があった。事実上、各方言区の学習の主なもの“北拉”であった。こうした特徴によって、新文字は、ほんとうに簡単に学べる文字となっていた。それ故に新文字は、困難な条件下で急速に広がっていった。一方それは、ばらばらで、正詞法があまり精密でなく、ラテン化運動史において、国語ローマ字以後の一種の過渡的な文字設計にしかなり得なかった。

1943年から44年にかけて、延安における新文字普及の活動は、急に識字教育に切りかえられた。なぜか？農民の側からは、漢字学習の要求がおこり、知識人や郷紳の側からは、新文字に対する疑問が出された。知識人たちの疑問とは<sup>69)</sup>：a) すべての必要な文献を新文字で印刷できない。b) 漢字を覚えた者は一夜で再教育できない。c) 新文字普及のためには、方言を統一する

68) 周有光，前掲書48ページ。

69) 倉石，前掲書121ページ。

かまたは標準語を第2の一般的言語にしなければならない、それは平時でさえ何十年もかかる。このような疑問によって、延安におけるラテン化運動は中止された。

「われわれの活動はすべて日本帝国主義を打倒するためである。……第一が戦争であり、つぎが生産であり、そのつぎが文化である。……人口百五十万の辺区には、まだ文盲が百余万人、巫神が二千人もおり、……」<sup>70)</sup>それは広範な大衆の頭の中の敵となっていた。

文盲一掃の必要性は、ますます痛感されていた。かくしてラテン化に代り、識字運動がくり広げられた。毛澤東はまたこう述べている：「全人口の八十パーセントをしめる文盲を一掃することは、新中国の重要な仕事である」<sup>71)</sup>。この運動は、早くも1921年頃から晏陽初(Yàn Yángchū)、陳鶴琴などの編集した《平民千字課》で行われ、河北省定県では、平民教育促進会が相当の成果をあげていた。延安でも「小先生」<sup>72)</sup>の小学生などを動員して、文盲一掃にとり組んだ。その結果、辺区住民の80%は、44年に最低300~400字を覚え、《解放日報》が読めるようになったということである。

1945年、上海の《時代日報》は「語文週刊」に語文革命の問題をとりあげ、香港でも新文字学会が復活した。48年にはラテン化新文字の読本類が数種類現われたほか、倪海曙が活動を再開し、《中国字ラテン化運動年表》(1941)、《中国拼音文字運動史簡編》、《ラテン化新文字概論》などを出した。49年3月《中国語文の新生》——ラテン化中国字運動二十年論文集(581頁)が刊行された。主として十月革命の後に発展したラテン化新文字の運動は、国民党支配地区、解放区を問わず、大きく、深くその影響力を及ぼしていった。識

70) 《毛澤東選集》第3巻、1968年265ページ。

71) 同上書364ページ。《光明日報》1977.9.22。

72) 齊藤秋男『評伝、陶行知』、勁草書房、1968年101ページ。小先生の運動は、陶の提唱による。34年1月「小先生総動員大会」を開く。《北京周報》1978.11.14 (No. 45)。1949年5月7日、中華全国青年第一回代表大会における周恩来報告「毛澤東に学ぼう」は、陶行知先生が農村運動を提唱していたことを指摘している。(なお当時、毛澤東は都市で労働運動に専念していた)。陶行知(1891-1946) 著名な教育者。

字教育による文盲一掃の運動も、49年10月の解放を迎えて、力強く前進していった。

※中国語の簡体字は、繁体字または日本の当用漢字に書きかえた。本文の人名には、発音 (pīnyīn) を表記した。(地名の発音は、省略した)。